

<書評論文>

## スキルは徳を説明するか

### ジュリア・アナス『徳は知なり』の論点整理と批判

渡辺一樹, 尾崎健太郎\*

#### 序

本稿は、2019年に出版されたジュリア・アナス『徳は知なり』（相澤康隆訳）の書評論文である。つうじょうの書評とは異なるかもしれない点として、本稿は、翻訳の評価などは行わず、ひたすら『徳は知なり』（以下「本書」と記載）の道徳哲学的な論点に集中する。すなわち、本書が道徳哲学に対して持っている含意に着目し、それを批判的に検討することのみを目指す。

『徳は知なり』は、「徳とはいかなるものか」というプラトンらしいの問いに応答しようとする著作である。本書のアイデアをひとこと言えば、「徳とはある種のスキルである」というものである。本書は、このアイデアの説明と、そのアイデアを基礎にした、伝統的な道徳哲学的問題（e.g. 徳の統一性・徳と幸福の関係）への応答から成り立っている。哲学的に言えば、「徳は教えられるか」（プラトン『メノン』）、「徳は幸福をもたらすのか」（アリストテレス『ニコマコス倫理学』）といった問題に明確な回答を与えるという点で本書は際立っている。また、応用哲学的に言っても、徳をスキルとして説明する本書は、徳倫理学と（人間の知的スキル発達の具体的過程を探求する）発達心理学といった自然科学的研究とを結びつけることを可能にしている（Stichter 2017: 2）。

本稿は、本書の内容と本書への反論を整理しつつ、先行研究とは別の批判的な論点を提起する。第一節では、本書の内容を要約する。第二節では、本書がいかに論じられてきたか、整理する。第三節では、ここまでの内容を踏まえて、筆者が本書の中心問題とみなす論点を指摘する。

---

\* 渡辺一樹 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程  
電子メール：kazuki-watanabe362[a]g.ecc.u-tokyo.ac.jp  
尾崎健太郎 無所属  
電子メール：kentaroo1001[a]gmail.com

## 1 『徳は知なり』の議論：よく生きるためのスキルとしての徳

本書には、著者自身による内容の要約が存在する (Annas 2015a)。本節では、基本的にはその要約に沿いつつ、ときに言葉を補いながら、本書の主題、内容、眼目を整理しておく。

まず、本書の主題は、「徳の説明」である (第1章<sup>1</sup>)。全体として、規範倫理的な理論を提示すること——いかなる行為が正しいのかについての徳倫理的な理論を立てること——ではなく、「徳とは何か」についての説明が目指されている。そして、本書の答えを一言で述べるならば、「徳とは人生をよく生きるためのスキルである<sup>2</sup>」。本書は、「徳は人生のスキルである」という主要な説明を提示したあとで、それが具体的にどのようなものか、伝統的な徳の説明にまつわる各種の論点 (どんな種類の徳があるか・徳と幸福はどう関わるか・徳と道徳的な善はどう関わるかなど) に沿って論じるという構成になっている。かくして本書全体を読むと、「徳は人生のスキルである」という説明が説得的かつ具体的に理解されることになる。

本書は、このような説明をとおして、徳をある種のスキルとして理解する立場の主要な源泉となった (Stichter 2017: 2)。これは、徳の説明に関して重要な進展である。というのも、論者たちは、アリストテレスいらい、徳は卓越した傾向性 (disposition) であり習慣と関わるといった点において一致してきたものの、徳がいかなる意味で卓越した傾向性であるかの説明については、不明な点を残してきたからである。これについては哲学史的にいくつかの立場があるが、アリストテレスによれば、徳はある種の中庸であることによって卓越している (『ニコマコス倫理学』第二卷第六章)。ヒュームによれば、徳は有用性 (usefulness) によって卓越している (『人間本性論』第三卷第三部第一節)。フィリッパ・フットによれば、徳は人間的特性 (実践的合理性) の発揮に適うものであることによって卓越している (『人間にとって善とは何か』第三章)。三つ目の立場をさ

---

<sup>1</sup> 本稿において、特にことわりなく参照箇所を引用する場合、本書の参照箇所を示す (例1：第3章、例2：51頁)。原書 (Annas 2011) は確認しているものの、簡便のため、邦訳の箇所のみを示している。

<sup>2</sup> スキル (skill) は、相澤氏の翻訳では「技能」と訳されている。

らに具体化すれば、徳は人間種において「隆盛 (flourishing)」<sup>3</sup>をもたらすために卓越している、と整理できる。中庸・有用性・隆盛といった性質によって徳は分析されてきた。徳をスキルとするアナスの立場は、中庸に含まれる知的な側面（実践知としての側面）を説明しつつ、有用性や隆盛に含まれる実践的な有益性を説明することができるだろう。

徳をスキルとして説明する本書の内容と眼目について、派生的な論点はいったんおいて、その主要なものを要約しておこう。アナスによれば、本書の基本的なアイデアはふたつある。第一に「徳とスキルのアナロジー（技能による類推）」（以下では「スキルアナロジー」と呼称）である（Annas 2015a: 282）。これは「徳を発達・発揮させることは、実践的スキルを発達・発揮させるのと同様の実践的な推論を伴う」という主張である。スキルアナロジーによって、徳は発達のなもの（developmental）であることが強調されている（第2章）。すなわち徳は、例えばピアノのスキルに似ているものであり、徐々にマスターされ、向上しつづけるものである。最初は親やロールモデルを真似ることからはじめて、徐々に習慣的に身につけるものとなっていく、機械的な反応ではなく知的な反応へと習熟していく。スキルアナロジーによって、このような段階的な説明を与えることができる。このことは、以下のように具体化される。すなわち、徳を身につけることには、ピアノのようなスキルを身につけると同じく、「学習の必要性（need to learn）」と「駆り立てる向上心（drive to aspire）」が関わっており、それゆえに徳はたんなるルーティン・ものまね・機械的反応とは区別される（第3章）。ピアノを習熟するとき、教師の真似・学習から出発して、向上心から教師の技能の仕組みを理解することでやがて自立して演奏するように、徳においても、ロールモデルの真似や理解から出発して、やがて知的に理解して自立して行為していくという構造がある。

このようにスキルアナロジーを持ち出し、徳を発達のものとして捉えることによって、本書は、徳倫理に対して投げかけられてきた伝統的な反論に応答することができる。例えば、徳倫理は、「正しい行為とは、「正しい行為をする人」がする行為である」というような説明になっており、循環的なものであるという反論がある（本書 69-70 頁）。この反論は、結局は正しい行為こそが有徳者を説

---

<sup>3</sup> しばしば「繁栄」と訳されるこの語について、相澤氏は「隆盛」を当てている。

明するという理解に繋がっている。しかし、この反論は、徳の発達論的性格を見落としている（第3章）。ある状況で有徳な人がなす正しい行為は、Aさんに食事を渡すことだとしよう。食事を渡すこと自体は、有徳でない人も行うことができる。とはいえ、有徳な人の行為は、外形的には同じように食事を渡す行為でも、より深い内容（知的な理解・状況についてのセンスなど）をともなう。つまり、有徳者はただ正しい行為を指示するのではなく、豊かな範型を示す。かくして、「真に正しい行為とは有徳な人が行うものである」という主張は、実質的な内容を持っている。無配慮に食事を渡す行為（学習の初期段階）とセンスをもって食事を渡す行為（習熟した有徳者）は異なるのであり、ひとは有徳者のほうから実質的な正しい行為を学ぶ。あるいはまた、徳倫理は保守的・相対的な規範をもたらすという反論がある（本書91頁）。というのも、徳は特定のローカルな文脈・伝統・社会のうちで学ばれるいじょう、その文脈それ自体を批判することはできないと考えられるからである。しかし、徳の習熟をもたらす向上心は、こうしたローカルな文脈それ自体を批判する潜勢力を有している（第4章）。すぐれたピアニストが従来の伝統を塗りかえる解釈をもたらすことができるように、有徳者は向上心によってローカルな道徳的伝統を乗り越えることができる。このことはじっさい、奴隷制廃止運動といった歴史に観察することができる、とアナスは論じる。

アナスのスキルアナロジーは、伝統的な反論への応答という点にとどまらず、ひじょうに積極的な主張も含意している点で注目し得る。すなわち、アナスの立場は、徳倫理の伝統的な論争点であった「徳の統一性 (the unity of the virtues)」を積極的に認めるのである（第6章）。「徳の統一性」とは、諸徳はひとつだけ取り出して持つことはできず、まとまりをもって獲得されるという考えである（142-3頁）。これについて、スキルアナロジーを考慮すると、まず、徳の学習は統一性を持ってなされるということが指摘できる。ピアニストが運指・テンポ・譜読みといった技能を総合的に発達させるのと同様に、慈善心を学ぶ際には適切な勇敢さや思いやりが必要とされるというような、統合的な発達構造がある（146-7頁; Annas 2015a: 284）。しかし、このようなアナスの所論は、反論を招きうる。すなわち、ひとの生はひじょうに多様なものだから、徳はその生の形態に応じて多様に発揮されうるいじょう、徳の統一性テーゼを維持することは困難なのではないか、というものである（154-5頁; Annas 2015a: 284）。スキルと

しての徳は多様すぎて（あらゆる職種に応じて異なる徳のスキルがありうる）、それを統合的に学習することなど不可能ではないか、という論点である。この反論への応答に至ってアナスは、重要な区別を持ち出す。すなわち、「生活の環境（the circumstances of a life）」と「生きることそれ自体（the living of a life）」の区別（156頁）<sup>4</sup>である。ここで、生活の環境はひとそれぞれに異なる具体的な人生の場や境遇であるが、どのような生活の環境にあっても、そのなかでよく生きるためのスキルとなるのが徳である。この区別によって、多様な環境にあっても、よく生きるためのスキルである徳を発揮するというのが重要だということになり、徳の統一性テーゼが維持される。

さて、本書の基本的なアイディアの一つ目がスキルアナロジーだとすれば、その第二のアイディアは、「善に対する肩入れ（commitment to goodness）」である（第7章; Annas 2015a: 286）。これはスキルアナロジーを超えた、実質的な主張である。というのも、通常スキルが善に対する肩入れをもたないのに対して（ピアノや柔術といったスキルは悪い目的にも使われうる）、徳は善に肩入れしているからである。この意味で、徳とは特別なスキルである。とはいえ、それがいかなる意味で善にコミットしているかは定かではなく、徳と関わる善については多様な理解がある。例えば、善をイデア的なものとするプラトンの伝統もあれば、人間本性の内部に観察できる性質だとするアリストテレス的伝統もある。こうした諸見解を整理しつつ、アナスは、「エウダイモニア主義（eudaimonism）」と呼ばれる立場こそが本書と調和的であることを示唆する（第8章; Annas 2015a: 286）。すなわち、徳が関わる善とは「エウダイモニア＝人生の目標としての幸福」である。徳は幸福をもたらすスキルなのである。ひとは生きていくうえで幸福を目指す。「生きることそれ自体」において目標となる幸福をもたらすスキルこそが徳なのである。かくして本書は、伝統的な徳倫理への反論に応答しつつ、「よく生きて幸福をもたらすスキル」として、徳を説明したのである。

---

<sup>4</sup> 訳語は翻訳に従っている。人生（a life）という語を「生活」と「生きること」という二通りに訳すには、前者が具体的な人生の諸相を指し、後者が抽象的な人生一般のありようを指すためだと思われる。

## 2 『徳は知なり』はどう論じられてきたか：先行研究の整理

第二節では、本書の議論に対してどのような反論が投げかけられてきたのかを整理する。そのために、第一節で紹介したアナス自身による要約も掲載された、*Journal of Value Inquiry* 上での本書のブックフォーラムを扱う。この企画においては、ナンシー・S・スノウ、クリスティン・スワントン、ロバート・アダムズといった徳倫理の専門家による本書への反論がなされ、それらに対してアナスが応答した。論者たちは多くの反論を指摘しているが、本稿ではそれらのうち、第一節で紹介した本書の中心的な議論と関わるものを取り上げる。

### スノウの反論：言葉で説明すること (articulacy) という条件の問題

スノウは、有徳者は自らの有徳な行為を説明できるはずだというアナスの主張を批判し、この能力と有徳であることとの関係を否定する。アナスの説明において、徳を身につけるのに「言葉で説明すること (articulacy)」という能力は重要である (35 頁)。実践的スキルの熟練者が初心者に自分がしていることとその重要性を説明できるように、徳の教師もまた学習者に徳とは何かとその重要性を説明できなければならないのである (Snow 2015: 299)。というのも、スキルや徳を自らのものとして発達させるためには、どのようにして、どのような理由からスキル・徳を行うかについて考える必要があるからである (Snow 2015: 299)。

スノウが着目するのは、アナスの説明において、「言葉で説明すること」という要件が「実際に有徳である人」と「有徳に見える人」を区別する条件になっていることである。

有徳に行為しているように見えるが、蓋を開けてみれば、なぜそのようにしたのかをまったく説明できないという人もいる。この場合には、技能の場合と同様に、私達が扱っているのは本来の徳ではなく、そこに至るまでの教育をまだ受けていない生まれつきの才能であると考えざるをえない (52 頁)。

しかし、アナスの条件に反して、スノウは有徳な個人がいつも自分の有徳な行為を説明できる必要はないと考える。たしかに有徳であろうとする人が自らの行

為についてまったく説明を与えられないのなら、その人は徳について何も学んでいないように思われる。この点については同意しつつも、スノウは、アナスの説明には次のような問題点があると指摘する (Snow 2015: 301)。まず、熟練者は自分がしていることを言葉で説明する能力を失うことがある。熟練者は自らの熟練的な行為を無意識に行うことはできるので意識的に自分がすることについてのやり方や理由などを考える必要はない。なので、事後に自分の行為を説明するように求められると立ち止まって考えを巡らす必要がある (Snow 2015: 301)。この主張に対して「熟練者は結局のところ反省を通じて自分が行ったことを説明できるが、学習者はそうではないのだ」と反論するとしても、スノウはさらに反論を続けることができる。たとえ有徳者が自らの有徳な行為を説明できるのだとしても、その説明がじっさいに有徳な行為を生み出したときの心理メカニズムと異なるかもしれない。つまり、事後的な説明が実際のメカニズムと合致している保証はないのである。

スノウの反論に対してアナスは、たとえ明確に言葉で説明することができない熟練者であっても、その人から我々が学ぶことができることは否定されないと応答している (Annas 2015b: 316)。また、説明と心理メカニズムが異なる可能性は否定できないものであり、スキルアナロジーが言葉の説明に関してうまく成立しない可能性を認める。というのも、スキルの場合には自らの体験を再構成するという動機づけは、徳の場合ほど急を要するものではないからである (Annas 2015b: 316)。とはいえ、言葉で十全に語るということが成り立たずとも、様々な形式での「言葉で説明すること」に着目することは重要であり、それが全くできない場合は、我々はそのひとを有徳者ではないと考える、とアナスは指摘している (Annas 2015b: 317)。

### アダムズの反論：徳の同一性について

アダムズは「正直であれ」、「勇敢であれ」といった伝統的な徳の分類を前提にした徳の教育について批判している。というのも、「ピアノを弾く」というスキルが様々な音楽のスタイルにおいても同一であるに対して、「正直であること」「勇敢さであること」に関連する能力や傾向が異なる状況において同一であるかは疑わしいからである (Adams 2015: 290)。

アナスは「勇敢であれ」といった規則を教えられた子供が、癌に冒された友人の勇敢さと戦士の勇敢さがあまりに異なるので混乱する、といった事態を描いている（64 頁）。ここでは、学習者が「勇敢さ」という徳の概念を理解するために、様々な異なる状況において同一の「勇敢さ」という徳が現れていることを理解しなければならないということが前提されている、とアダムズは論じる（Adams 2015: 290）。しかし、戦士の勇敢さは逃げるのではなく大きな危険を受け入れるといったことであるのに対して、癌患者の勇気は逃れられない死の苦しみや痛みに対処するといったものである。我々は両方の事例に対して「勇敢さ」という徳の名称を与えているが、そこで想定されている能力や傾向までも同一であると考えられる理由があるのだろうか？とアダムズは批判する（Adams 2015: 290）。

これに対してアナスは、戦士にも病人にも共通して「勇敢さ」という徳を適用できるのは、外的な状況や振る舞いだけでなく、危険や苦痛に直面したりその状況に耐えたりする人の内的な思考の方にこそ徳の名称が適用されているからである、と応答する（Annas 2015b: 321）。徳の学習において重要となるのは、状況それ自体ではなく、人々がそれに直面している仕方なのである（Annas 2015b: 321）。

### スワントンの反論：正しい行為についての異なる説明

クリスティン・スワントンによる本書への反論は、いくつかの論点に及ぶものの、第一節で要約した主要なアイデアと関わるものとしてそのうちの一点を取り上げる。すなわち、スワントンは、正しい行為の説明として、学習の初期段階の者と習熟した有徳者をはっきりと区別するアナスの議論を批判し、徳倫理はより実質的な正しい行為の説明を行うべきであると論じる（Swanton 2015: 308-312）。発達論的な説明を重視するアナスにおいては、有徳者の行為とそれを真似るだけの学習者の行為に質的な違いが想定されており、両者ともがなしうる「正しい行為」それ自体は重要ではないとする。曰く、「正しい」は薄い倫理的概念であり、「ここから導かれる一つの結論は、ある行為がなすべき正しいことであるということは、まったくと言っていいほど情報をもたらさない」（73 頁）。スワントンは、この結論を、「正しい行為」についての「懐疑的結論（the



skeptical conclusion) 」と呼びつつ (Swanton 2015: 308) 、これと異なる、正しい行為についての実質的説明を与えようとするのである。

スワントンは、あらゆる正しい行為についてそれを「正しいものにする特徴 (right-making features) 」が存在するわけではないとするアナスの前提 (80 頁) をみとめつつ、じしんの「正しい行為とは関連する徳のターゲットを当てる (hitting the targets of relevant virtues) 行為である」という説明こそが、正しい行為を実質的に説明するものであると論じる (Swanton 2015: 311)<sup>5</sup>。すなわち、スワントンによれば、徳はある状況下においてそのターゲットを持つ。例えば、ある状況では、気前の良さの徳は、友人 A の苦境に共感すること、その友人に食事を与えること、さりげなく近況を相談することといった種々のターゲットを有する。スワントンによれば、このような「徳のターゲットを適切に当てること」こそが正しい行為を説明するのである (Swanton 2015: 311) 。この説明は、アナスよりも正しい行為を実質的なものとしつつ、学習者と有徳者の質的な違いも担保する。学習者はその状況において明瞭な徳のターゲットとなる行為を当てられるのだが、有徳者はより不明瞭で困難なターゲットとなる行為もなすことができるというわけである。

アナスは、このようなスワントンのターゲット中心的な説明に関して、それが行為の結果と動機を切断することを問題視する (Annas 2015b: 318) 。ターゲットとなる行為を当てることを考慮する限りでは、行為者の動機や意図は問題とならない。悪い動機からたまたま正しい行為をする時もあれば、有徳な動機から行為しつつも運悪く正しい行為をし損ねることもある。このような切断はできないのではないか。まず、この切断は、徳の説明として不適切であると思われる。徳を発達させるとき、動機と正しい行為とは不断に混ざり合いつつ機能する。適切な動機を持つことで適切な行為を導き、適切な行為を学ぶ際には適切な動機も学ばねばならない。そうだとすれば、しかし、動機と正しい行為を単純に切断することは徳倫理の理論として誤っているように思われる (むしろ行為功利主義の理論に接近してしまっている) 。また、動機を度外視することは、有徳な動機を持ちつつ運悪く正しい行為をし損ねた行為者に対する反応を見誤るだろ

---

<sup>5</sup> スワントンの立場は、じしんによって「ターゲット中心的徳倫理」と特徴づけられる (Swanton 2001) 。

う。そのとき「あなたは正しい行為をしなかった」と非難することは過剰であるように思われる。

### 3 反論

本節では、先行研究ではあまり指摘されてこなかった、スキル徳倫理＝アナスの議論が抱える問題を指摘したい。それは、「錯誤についての理論」と「有徳者と悪の関係」の問題である。これらは、多くの徳倫理の理論・説明にあてはまる問題なのだが、とりわけスキル徳倫理に対して当てはまると言えるポイントがある。というのも、スキル徳倫理は、悪徳との関係が一面的すぎるからである。すなわち、スキル徳倫理は、徳をスキルの一種とするために、悪徳や悪がたんなるスキルの学習の失敗でしかなくなってしまう。しかし、これは、ある種の独断論や素朴すぎる徳の理解をもたらしてしまう。このことを確認しておこう。

#### 錯誤についての理論

本稿がみるところ、アナスの所論の最も深刻な問題は、それが適切な「錯誤についての理論 (a theory of error)」を有していないという点である。「錯誤についての理論」とは、ひとが価値判断に関して錯誤に陥ることの実質的説明である。例えば、10歳の少年が恋に破れ、そのことをもって人生に絶望し、自殺を図っているとしよう。この少年を説得しようとする周囲の人間は、「この少年は自分にとって本当によいことを見誤っている」と考えるだろう。このとき、少年に対して「本当によいこと」を説明するためには、たんに「お前はバカだ」と説教・拒絶するのではなく（それでは「大人は判ってくれない」となって悲劇的な結末をもたらすだろう）、なぜ少年が「自分にとって本当によいこと」を見誤っているのか、実質的な説明を与える必要がある。このように、ある価値判断 X を受け入れないひとに対して、その X がそのひとにも当てはまると説明するとき、その説明が単純なイデオロギーの発露やパターンリズムにならないためには、「錯誤についての理論」が必要になる。

錯誤についての理論は、バーナード・ウィリアムズがアリストテレス的な徳の理論についてその必要性を提起したものである (Williams 1985: 49)。すなわちアリストテレス的な理論によれば、徳を身につけることこそがひとの本当の

幸福をもたらすのだが、悪徳の人びとはそのことを理解しない。悪徳の人びとが自らの本当の幸福に関して錯誤に陥っていること、このことをアリストテレスは説明する必要がある。ウィリアムズの診断によれば、アリストテレスじしんの説明は失敗している。彼によればアリストテレスが提起する錯誤についての理論とは、「育ちの悪さ」によって誤った快樂を追求するように習慣づけられる」というものであり、これは失敗している（Williams 1985: 50）。育ちの悪さと錯誤の関係は明らかではない。育ちのよしあしと本当の幸福の関係は不明であるし、育ちが悪くても有徳になることは可能であろう。

錯誤についての理論の必要性は、アリストテレスをはじめとする多くの徳倫理の議論に当てはまるものだが、アナスの議論にも当てはまるだろう。すでに確認したように、アナスは徳を「人生をよく生き、幸福をもたらすスキル」と説明するのであった。そうだとすれば、悪徳をもって生きる人は、たとえなんらかの財などによって主観的な快樂を得ているとしても、本当の幸福を生きているわけではないことになる。じっさいアナスは、財によってもたらされる主観的な快樂を真の幸福ではないと論じ、むしろ徳に従って能動的に生きることこそ幸福であると論じつつ（248-253 頁）、悪徳の人でありながら幸福であるような人はありえないと、（そのような人の可能性を論じたウィリアムズの立場を否定しつつ）主張している（279-280 頁）。このように「本当の幸福」を主張するとき、それとは異なる「偽の幸福」を生きる悪徳の人物を説明するために、錯誤についての理論が必要になるはずである。

本稿がみるところ、アナスの議論は錯誤についての理論を有しているのだが、それはひじょうに不十分なものである。アナスにおける錯誤についての理論は、スキルアナロジーに全面的に依存するものである。すなわち、錯誤は、学習の失敗によって説明される。アナスによれば、駆り立てる向上心それ自体はあらゆる人に開かれているものの、「暴力と貧困が蔓延した劣悪な環境」（e.g. 「第三世界の大都市の郊外にあるごみ溜め」のような環境）によって学習が妨げられてしまう（54 頁）。徳へと向かう学習能力じたいは人間に常にそなわっているのであり、環境こそが問題なのである。かくして、アナスにおいて錯誤は学習環境の問題である。社会・環境によって、うまく徳を学べなかった者は、徳へのアクセスを絶たれ、本当の幸福を理解できなくなってしまう。じじつアナスは、幸福に

ついて誤った概念（快樂主義的な概念）を持っているものは、徳をうまく学習できず、機械的な反応を繰り返している者であると論じている（268-9頁）。

アナスによる錯誤についての理論は、しかし、その「劣悪な環境」についてのブルジョワ的解釈の問題（第三世界のスラムは、イギリスのパブリックスクールのようなブルジョワの教育環境と比べて、徳の学習において特別に問題のある場所なのだろうか）をおくにしても、実質的なものとは言い難いだろう。それは、ウィリアムズがみるところのアリストテレスが提起したような「育ちの悪さ」による説明とほとんど変わらない。アナスの説明の問題は、とりわけ以下のような考慮から指摘できる。すなわち、環境に適応した学習の複雑さをうまく説明できないという点である。例えば、映画『ゴッドファーザー』シリーズで描かれるようなマフィアの世界・家系で暮らしてきた人物（マイケル）がいるとしよう。マイケルはひじょうに学習能力の高い人物であり、ロールモデルとしての父親から学びつつ、即座にマフィアの世界のルールと振る舞い（これはひじょうに反道徳的なものとする）を理解する。そのスキルを活かしてマイケルは成功し、主観的に「幸福」な生を歩むとしよう。マイケルはじしんの生活の環境においてスキルの高い人物であり、（マフィア的な）「徳」のある存在である。アナスであれば、このようなマイケルの「幸福」を偽物であると断じ、その錯誤を彼の環境の劣悪さによって説明するだろう。しかし、アナスのスキルアナロジーを前提にする限り、マイケルはひじょうに生活スキルの高い人物であることは確かである。「マイケルの生活環境は錯誤しかもたらさない」という点を論点先取しない限り、マイケルが錯誤に陥っていることは、「よく生きるスキル」というアナスの説明からは出てこない。結局のところ、アナスにおける錯誤についての理論は、なんらかの普遍主義的に理解された徳が一意に定まっておき、そのために適した環境（e.g. 先進国のブルジョワ家庭）とそうでない環境（e.g. スラム・マフィア）が普遍的に決まっているという前提のもとでのみ成り立つ。このような、徳と徳の学習環境に関する、普遍主義的な理解は、すくなくともアナスのスキルアナロジーからは直接説明されないし、人間本性に関する強い前提を必要とするだろう。

かくして、アナスによる徳の説明は、錯誤についての適切な理論を欠いており、「アナスが是認するような環境でのスキルのみが幸福をもたらす」という独

断主義的なものとなってしまっている。学習の失敗のモデルのみによって、生活の環境に適応した悪徳やマフィア的スキルの問題を指摘するのは困難である。

### 有徳者と悪の関係の問題：欺しと回心

徳をスキルによって、悪徳をスキルの学習の失敗によって説明するアナスの議論は、そのほかにも問題を抱えているように思われる。先行研究において言及が少ないものの、指摘可能なものとして、スキル徳倫理において有徳者と悪の関係が不明であるという問題がある。

第一に、「スキルの所有者はそのスキルの意図的な差し控えにおいても秀でている」という、プラトンが指摘した論点がある（プラトン『ヒッピアス（小）』）。プラトンはアナスと同様にスキルアナロジーに依拠したうえで、スキルに習熟した者は欺しのスキルにおいても秀でていることを指摘する。例えば、綺麗に歌えるが意図的に下手なふりをしている人は、そのような欺しのできない人よりもスキルが高いだろう。これは徳について成り立つだろうか。いっぽうで、意図的に悪をなすこともできる有徳者は、それができない有徳者よりも、道徳的に劣っているように考えられる。悪を考えることもできない有徳者は、そうでない有徳者よりも道徳的に善いように思われる。じっさいアナスは、第一節でみたように、「善への肩入れ」においてそのことを説明できる。徳は善をなすことに肩入れしたスキルなのである。しかし、たほうで、意図的に悪をなすことが能力的に可能である有徳者は、それが不可能である有徳者よりも、よく生きるスキルに長けていて幸福に生きることができるとも考えられる。どちらが徳についての適切な理解なのだろうか。ここで、幸福とスキルを考慮するだけでは、どちらがより有徳であるか判断するのは不明である。スキルアナロジーや幸福に関する限り、悪をなす能力もある有徳者の方が幸福のスキルが高いとみなすことが可能だからである。かくして、欺しの問題、あるいは「有徳者は悪をなすことが可能なのか」というプラトンの問題を考えるとき、スキル徳倫理は困難な状況に立たされるように思われる。

第二に、回心の問題がある。すなわち、悪徳を経験したうえで回心して有徳になった行為者を、スキル徳倫理がいかにか説明するのか、不明な点がある。例えば、アウグスティヌスは、梨を盗むといった悪徳の生活を経験したうえで、それを反省して、徳のある生活を営むようになった。あるいは、更生した元不良がじしん

の経験を踏まえて倫理を語るといった事象も往々にしてある。このような回心の事例において重要なのは、回心者は、悪徳をよく知っているからこそ、有徳だと言えるポイントがあるという点である。すなわち、アウグスティヌスや元不良は、悪への誘惑・動機をよく理解しているからこそ、その問題を適切に認識することができ、それを他者に対して説得的に教示することができる。こうした回心の事例をスキル徳倫理がいかに関係するかに説明するについては、不明な点を残している。というのも、徳が善へのコミットメントによって特徴づけられるスキルであるとき、悪に接近したという事実は、徳とはなんの関係も持たないはずだからである。アナスの説明からすれば、恵まれた環境で道徳的に優れた行為をしつづけてきた有徳者は、悪徳から回心した有徳者よりも優れているはずである。しかし、このような無垢の有徳者が回心者よりもスキルの点で優れているかは不明である。というのも、回心者は無垢の有徳者よりも良い教師になるだろうし、徳と悪徳を「言葉で説明すること (articulacy)」においてもより優れているだろうからである。スキル徳倫理が漸進的なスキルの発展のモデルを前提しているとするれば、それは、悪の構造と問題をよく理解する回心者の持つ徳のスキルをうまく説明できないように思われる。

## 結論

本稿では、ジュリア・アナス『徳は知なり』の内容と論じられ方を要約するとともに、先行研究であまり指摘されてこなかった問題を指摘した。第一節では、本書の主要な内容を要約し、幸福をもたらす、よく生きるスキルとして徳が説明されることを整理した。第二節では、本書がいかに関係するかに論じられてきたのか、徳倫理の専門家とアナスのあいだで交わされた議論をもとに整理した。第三節では、アナスへの本稿独自の反論を指摘した。アナスのスキル徳倫理は、第一に、適切な錯誤についての理論を有していない。錯誤を学習環境の劣悪さによって説明するアナスの議論は、アナスの議論によっては説明されていない普遍主義的な徳の理解を前提にしないと理解できないものであり、独断主義的である。つまり、生活環境に適応して反道徳的なスキルを身につけた行為者の幸福を独断的に排除してしまう。第二に、アナスの議論は、有徳者と悪の関係に関して不明である。悪をなすことも能力的に可能な有徳者、あるいは、かつて悪をなしてその構

造と動機を理解する回心した有徳者が存在する。このような有徳者と悪をなすことがまったく不可能な無垢の有徳者とを比べたとき、どちらの方がスキルを有すると言えるのか、不明である。スキル徳倫理は、有徳者と悪の関係について、より積極的な説明を提供する必要がある。

## 謝辞

筆者らは2021年8月29日から2022年1月31日まで開催された『徳は知なり』の読書会に参加していた。読書会での議論は本稿のアイデアのもととなり、参加者の皆様に感謝する。本稿は、序、第一節、第二節の後半部、第三節、結論を渡辺が、第二節の前半部を尾崎が執筆し、最後に相互チェックをする形で書かれた。また本稿は、JSPS 科研費 22J22397 の助成を受けた研究成果の一部である。

## 文献一覧

- Adams, R. M. (2015). “Comments on *Intelligent Virtue*: Moral Education, Aspiration, and Altruism.” *Journal of Value Inquiry* 49 (1-2):289-295.
- Annas, J. (2011). *Intelligent Virtue*, Oxford U. P.
- Annas, J. (2015a). “Book Forum on *Intelligent Virtue*, Oxford University Press, 2014 by Julia Annas: Précis of *Intelligent Virtue*.” *Journal of Value Inquiry* 49 (1-2):281-288.
- Annas J. (2015b). “Reply to Commentators.” *Journal of Value Inquiry* 49 (1-2):315-323.
- Snow, N. (2015). “Comments on *Intelligent Virtue*: Outsmarting Situationism.” *Journal of Value Inquiry* 49 (1-2):297-306.
- Stichter, M. (2018). “Virtue as a Skill.” In Snow, N. (Ed.), *The Oxford Handbook of Virtue*, Oxford Handbooks (Online Edition), accessed 15 Mar. 2023.
- Swanton, C. (2001). “A Virtue Ethical Account of Right Action.” *Ethics* 112(1), 32–52.
- Swanton, C. (2015). “Comments on *Intelligent Virtue*: Rightness and Exemplars of Virtue.” *Journal of Value Inquiry* 49 (1-2):307-314.

Williams, B. (1985/2011). *Ethics and the Limits of Philosophy*, Routledge Classics.

〔ウィリアムズ, B. (2020) 『生き方について哲学は何が言えるか』 (森際康友・下川潔訳) ちくま学芸文庫〕

アナス, J. (2019) 『徳は知なり——幸福に生きるための倫理学』 (相澤康隆訳) 春秋社

アリストテレス (2015) 『ニコマコス倫理学 (上)』 (渡辺・立花訳) 光文社古典新訳文庫

ヒューム, D. (2019) 『道徳について——人間本性論 3』 (神野・林訳) 京都大学学術出版会

フット, F. (2014) 『人間にとって善とは何か——徳倫理学入門』 (高橋久一郎監訳) 筑摩書房

プラトン (1975) 「ヒッピアス (小)」 (戸塚七郎訳) 『プラトン全集<10>』 所収, 岩波書店

プラトン (2012) 『メノン——徳について』 (渡辺邦夫訳) 光文社古典新訳文庫